

(説明)

「先端技術を活用した農林水産研究高度化事業」とは、いわゆる競争的研究資金制度の1つです。

本事業については、今年度から、食の安全・安心に係るリスク管理施策推進上必要な研究を行う「リスク管理型研究」を創設しました。

当該タイプについては、現在19課題を実施中ですが、今般、新たに以下の3課題を開始します。

1 「弱毒タイプの鳥インフルエンザウイルスの伝播性・強毒化の検討」

(研究機関：(独)農業・生物系特定産業技術研究機構動物衛生研究所ほか2機関)

弱毒タイプの高病原性鳥インフルエンザ(今般、茨城県で発生したタイプ)は、強毒タイプ(平成16年、山口県、京都府等で発生したタイプ)と比較して、鶏に感染してもほとんど症状を示さないため、感染が確認された時点で既に地域にまん延した事態となることが想定されます。

その特性を踏まえた的確なリスク管理措置を講ずるため、感染を早期発見するための検査プログラムや鶏群間のまん延防止対策の確立、及び強毒化の可能性の検討等に向けて、鶏体内のウイルス増殖や伝播要因等に係る調査研究を行います。

2 「口蹄疫を対象とした輸入検疫措置に関する研究」

(研究機関：(独)農業・生物系特定産業技術研究機構動物衛生研究所ほか1機関)

動物検疫に係る国際基準作成機関である国際獣疫事務局(OIE)は、口蹄疫ワクチン接種国・地域について、一定の基準を満たしている場合には清浄性を認めることとなっています。しかし、現在の基準では清浄性認定のための詳細な評価手法までは定められていません。

このためワクチン接種による清浄国・地域のリスクの評価に係る情報収集・分析のため、ワクチン接種動物(牛、豚等)と感染

動物との鑑別手法、ワクチン抗体の経時的動態調査、動物・畜産物の輸入によるリスク要因の解明等のための調査・分析を行います。

3 「トランス脂肪酸及びクロロプロパノールの摂取量に関する調査研究」

（研究機関：（独）食品総合研究所ほか1機関）

食品の加工段階で生成される有害化学物質のうち、原材料中の脂質から生成されるトランス脂肪酸とクロロプロパノール類については、Codexを始め各国がその規制について検討しているところですが、日本においては食品中の含有量が十分に明らかになってはいません。

このため、食品の加工流通段階におけるリスク管理対策について検討を行うことを目的として、トランス脂肪酸とクロロプロパノール類の食品中の含有量を把握し、その摂取量の推定等を行います。